

野 鳥 観 察 記

常 岡 雅 美*

昭和53年の秋、鳥類調査の件で、その当時まで通いながっていた九大農学部2号館横にある畜産学科動物学教室を訪れたのが、野鳥観察記録のきっかけとなり、以来、博多湾の鳥類を中心に、4年間約60回の調査に参加してきた。

調査メンバーは、動物学教室の白石助教授を中心に、鳥類を専攻していた院生(現在鹿児島大学歯学部第2口腔解剖学教室助手)、日本野鳥の会福岡支部の有志、九大生物研および福大生物研メンバーに、香椎高校生物部の見習い野鳥班を加えた面々であった。

博多湾関連調査は、まず、調査の方法と湾全域で主要な生息場を探す予備調査から始まり、次に、湾全域の主要生息地調査、その後の博多湾東西の両計画地周辺部における詳細調査、昭和56年度は博多湾東部地域の未調査地帯を穴埋めする形で進められ、今年度は西部野鳥モニタリングと、多々良・宇美川感潮域における野鳥の生息域調査、野鳥干渉距離調査並びに海ガモ、カイツブリ類の利用水深調査等の保全対策関連調査を実施している。この間、博多湾以外の野鳥調査としては、横瀬石油備蓄基地の動物調査、三京粗大ゴミ処理地の動物調査、三池港埋め立てアセスの野鳥調査等に参加してきた。

野鳥観察は、記録野帳、8倍率の双眼鏡、20倍か25倍の望遠鏡(三脚付きの望遠鏡で普通プロミナあるいはスポットテングスコープと呼ばれている)および数取り機(カ



唐の原河口のユリカモメ(左)とハマシギ(右)

* 当協会環境アセス部研究員 農学博士

ウンター)を用いて、いたって簡単に行われているように見受けられる。しかし実際に観察記録員になって調査を行ってみると、思ったよりはるかに困難なことに突き当たる。まず第1は双眼鏡や望遠鏡が高倍率のため、その視野の狭さである。肉眼で数百メートル前方に鳥影を認めても、双眼鏡やプロミナではそれら対象物をなかなか視野の中にとらえることが出来ず、また、とらえたとしても、図鑑と野鳥を見比べようと図鑑を開く間に、野鳥は何処かへ姿を消すという具合で、これが何度となく繰り返された。これが低空を猛スピードで通過していくチヨウゲボウやハヤブサになると、視野にとらえて特徴を脳裏に刻み込むまで相当年数が必要である。第2は、干潟とはほぼ同一系統の保護色をしたシギ・チドリ類の正確な数のカウントである。光線の具合では、なんの苦もなくカウントされるシギ・チドリも一旦干潟の中に溶け込んでしまうと、目の前にいてもなかなか正確に数えあげるのが難しくなる。第3は、海上の波間に浮ぶ海ガモやカイツブリのカウントである。波と波の谷間に入ると隠れて見えなくなること、また、これらの野鳥は採餌のため、各々が勝手に潜水することである。例えば、プロミナでウミアイサを視野の中にとらえ、これがウミアイサですよと説明しても、その答は何もいませんよと返ってくる。第4は、鳥種の識別の問題である。野鳥には雌雄でひどく色合いや形態の異なるもの、また、同じ個体でも夏羽と冬羽で大きく色合いが異なるもの、幼鳥や成鳥で大きく色合いが違うものの他に、2種間の雑種や雄が1時期雌の色合いに似るエクリップスなどがあり、また、それらの途中段階も合わせて出現する。このため、日本の鳥はまだ500種程しか確認されていないと云っても、その識別は容易ではない。この他にもまだある。昭和56年度秋の調査時であったと思うが、雁の巣と奈多団地の途中（博多湾側の奈多漁港）の前浜干潟で調査中に、小型シギでほとんど大部分が白色という個体を発見した。形状はどことなく見たことはあるが、どうしても色合いに記憶が無い。図



頭隠して尻隠さずのコアシサシの雛
(雁の巣航空管判塔横の空地)

鑑で見ても種の識別が出来ないので、新型シギと一時は大騒ぎしたが、間もなくハマシギの白化したものであることが判明した。この時の調査員の中には、大学のゼミの合間を抜けて、連日写真撮影に出かけた者もいた。第5は、大群のカウントである。大群、例えばハマシギ、スズガモ、ホシハジロなど数千羽、数万羽の大群のカウントは、誠に歯を食いしばりながら忍耐の限界に挑戦せねばならない。場馴れした観察者でない限り、野鳥が他の場所へ移動する前に、出来るだけ早く羽数を読みとりながら、カウンターを押し続ける限界は、500回から800回で、それ以上になると、急にプロミナを覗く形相まで大きく変化して来る。

野鳥の世界を観察していると、いろいろと面白いことに会おうし、野鳥の母親の深い愛情にも触れる。ある初夏のことだが、仲間からの情報で、香椎浜ニュータウン(建設前の荒地)にツバメチドリが営巣しているらしいとの報告、ツバメチドリの営巣となれば、博多湾周辺ではビッグニュースなので、それは大変と大急ぎで、当時院生の彼と現地へ赴いた。100ヘクタールの荒地を2人で約2時間程、双眼鏡を片手に歩き回ったが、行けども探せどもついにツバメチドリの存在はつかむことなく終わった。疲れ果てて、海岸近くにある約半ヘクタールのアシがまばらに生えた水溜りまで辿り着いた時のこと、大きな羽うち音とともに約50羽のカルガモが飛び立ち、不意打ちをくらって2人はその場に釘づけになった。一斉に飛び立ったのだから、水溜りには1羽も残っている筈はなかったのだが、注意すると1羽のカルガモが低く鳴きながら泳いでいる。どうしたのだろうか、怪我でもしたのではないかと注視続けていると、何と後方に7羽の子ガモが続いていた。親ガモが、1羽だけ残って子ガモを安全な場所(アシで見えなくなる所)へ誘導しているのであった。

私の小さい頃、よく、鳥はとり目で夜暗くなると何も見えなくなると聞いて育ってきたし、また、ビタミンAが欠乏して暗くなると見えなくなる病名も、その理由で付いたものだと思ってきた。しかし、夜のバウンディングに出て、このことが大きな誤りであると判った。まず、シギ・チドリ類は日暮れ後も、干潟の彼方此方で採餌していたし、第2に、すっかり夜になっているのに、ピューイー、ピューイーと鳴きながら飛び回っていた。更に、驚くことに、夕方、干潟を2分する様に張ったバウンディング用のカスミ網にほとんどかかるとなく、網の張ってある方向と平行に飛んで、網を明らかに避けるという事実であった。

次に、繁殖中のコアシサシが示した行動についての体験を語ろう。これも夏に入っただばかりの頃、私は理学部生態学教室の学生数人と、調査時に目をつけていたコアシサシの集団営巣地へ調査に出かけたことがある。この調査の目的は、1ヘクタール中にある営巣箇所へ朱塗りの箸(目印)を立て、産み落とされた卵の個数や大きさを記録し、雛の数を記録することにあつた。この集団営巣地は雁の巣にある航空管制塔横の荒地約10ヘクタールで、約300個の巣が観察された所で、雛が孵るまで数回観察に出かけた。巣は、直径3~5センチ程度の浅いくぼみで、各々に小さな赤味と

青味を帯びたまだら模様の卵が1～3個産み落されていた。雛が大部分の巣で確認される様になった時のこと、上でギアーギアーと鳴き騒ぐ声が、何時もより激しくなった。上空を見上げたら、群れの中の1羽が急に脳天目掛け急降下してきた。私は身をちぢめ両手で頭をカバーして、嘴の衝突を待ったが、幸い、ゴツンという音はしなかった。急降下による威嚇はその後、その地点を離れるまで続けられ、その間、期せずして、コアジサシによる私への攻撃行動は私達の仲間を喜ばず結果となった。

この野鳥と同じカモメ科で、昔は都鳥と呼ばれた鳥と云えば、少し野鳥が好きな人なら、直ぐユリカモメと分かる。次にこの野鳥の少し変わった餌取り法を紹介することにする。カモメ類は普通、魚や魚のあらを主な餌にしていると云われるが、観察中に見たものはこれと違っていた。まず、シギ科のハマシギが河口部の1センチの深さもない渦に降りて、渦の中から多毛類のゴカイを引張り出す。次に、そのゴカイをハマシギが飲み込もうとする瞬間、待ってましたとばかり、なりの大きなユリカモメが襲いかかる。ハマシギは体長約20センチ、これに対して、ユリカモメは約40センチの巨体であるから、ハマシギは慌てて逃げ惑う。追うユリカモメは、盛んに大きな声でギャー、ギャーと鳴きながら、凄まじく追い立てるので、河口部は大小2羽の空中戦の戦場となる。ハマシギが口にくわえた餌を慌ててか、諦めてかして落すまでこの空中戦はしっように続けられる。ユリカモメがもうきん類のトウゾクカモメの様な採餌法を見せたのは昨年が始めてだった。大変面白い見世物であったが、ユリカモメのこのような行動の変化は、野鳥の食料事情に対する私の不安感をかき立てた。

餌のとり方で面白かったのに、ウミスズメの漁がある。ウミスズメは、繁殖期には、島や岩棚などの陸に集まるが、この時以外には、海上で生活を営む海上生活者である。博多湾周辺では、ときおり、岸近くまで数羽が近づくことはあるが、ほとんど見られないが、ウミスズメを多数確認したのは、能古島の西側海上、湾口部に近い所であった。この野鳥は数羽から10数羽程度の群れを作り、群れが5～6羽以上になると、連携プレイを披露した。まず、申し合わせたように横に一直線に並び、群全体がちょうど棒を横に浮かべて前に進めるように、いっせいに同じスピードで泳ぐ。次に、またいっせいに全員が水中に姿を消す。ウミスズメは、一般にイワシとかイカナゴなどの表層の魚類を餌にしていると云われているので、群れたイワシを捕獲するための行動であったと考えられる。ウミスズメのこの採餌法は、一条乱れぬ完璧なチームプレイで、自然の驚異に感嘆したひとこまであった。

野鳥のうちで、最も平凡なものに、スズメがあるが、このごくありふれた野鳥の育雛にも感心したことがある。ある時、自宅の庭先で米を与えたことがあったが、親スズメは子スズメに決して丸のまま（粒々のまま）を与えなかった。我々の目で見れば米粒は小さな粒であるが、親スズメが子スズメの餌として見る場合は、そん

な物ではないようだ。親スズメが、子スズメに米粒を与える時は、驚く程、米粒の1粒1粒を粉々に碎き割って、消化しやすくして与えていた。

トビはワシタカの仲間で、普通、野原、田園、河川や海岸などに生息し、冬場は多数が1ヶ所に集って動物の死体などを餌に生きていると云われ、一般の図鑑では留鳥扱いになっていることが多い。しかし、私は野鳥を観察していく中で、一部反論をしたい様なトビの行動を見たことがある。確かにトビは年中見かけるワシタカの仲間なので、一部は間違いなく留鳥でないかと考えられるが、ある晩秋の晴れた朝、100羽近くがわが家付近に集合し、輪を描きながら、恐らく数100メートルの高さまで舞い上り、数10回から100回を超える程、輪を書いた後、不意に何かの示唆を受け、滑る様に1羽ずつ2方向のみに姿を消していくのを観察した。しかし、その群れの中には、一度は高く舞い上がって、再び地上へ降りて来るトビもいた。このことを観察した後、動物学教室の院生(大村空港のトビの調査者)に、「トビは渡りもするだろう。僕は2方向だけに独立に1羽ずつばらばらに渡っていくのを見たよ」と云ったら、「ウン、勿論さ」と云う答が返ってきた。この時以来、ワシタカ科のトビは渡り鳥で、福岡県周辺ではその一部が留鳥であると信じるようになった。

以上が、私がかここ数年間の体験してきた観察記であるが、実際に、生物の観察はあくことのない面白さを秘めたものだと思う。このことは、熱心な探鳥家達の異常に感じられる程の熱意からも読み取られた。例えば、愛鳥家だけの集りなら、集合時間は、真夜中でもいとわない。



体調をそこない雁の巣鼻で養生中のオオハム
(普通は外洋で、海が荒れると内湾にも避難してくる)